

昨年9月、台湾は大地震5周年を迎えた。今から6年前、南投県を震源にしたM7.3の直下型地震が起き、2400余名の死者を出す惨事となった。日本なら、5周年にはさしずめ特別番組が放送されたり、追悼のイベントが催されるだろうが、台北にいる限り、とくに目立った動きはなかった。

それは台湾の人たちのこだわりのなきともとれるが、そこからは逆に台湾に



生きる人びとの竹のような生命力を感じるのである。

5周年の最大の話題となったのは、被災した人びとの再生のドラマに等身大に向き合ったドキュメンタリー『生命(いのち)』(148分)が公開されたことであろう。

監督は台湾を代表するドキュメンタリスト、呉乙峰(45歳)。まだ若いが台湾の底辺をはいつくばって生きる庶民の

エネルギーを撮り続けてきた。

現在、新潟の山古志村の映像を見ても胸が痛むが、台湾中部の山間では一つの集落が完全に埋没してしまうほどの惨状だった。呉監督は、月世界のように変貌した村の跡に4年間カメラを据え、家族を失った青年たちが再生を模索する日々を執拗に追い続けたのである。そして、見事、一昨年の山形映画祭で優秀作品賞を受賞した。

## 第二十一回

# 台湾の「生命」

柳本通彦

やなぎもと・みちひこ  
京都市生まれ。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦(現代書館)」  
「台湾革命(集英社新書)」など。  
99年度「潮賞」ノンフィクション部  
門優秀賞受賞。

授賞を機に黄さんが初めて出国し、日本の土を踏んだことである。

黄さんは、この台湾で日本語の文学を書き続けてきた。その傍ら、台北に俳句会を組織し、30年にわたって発句の指導にあたってきた。最近では、日本から取材に訪れる研究者やメディアの人も多いが、そのなかには、「台湾人が日本時代を懐かしがって俳句を作っている」などというトンでもない誤解をする

呉乙峰さんは、もつとも敬愛する台湾人の一人であるが、最近、もう一人

の尊敬する台湾人作家に朗報があった。以前にこのコーナーでも紹介した「台湾俳句歳時記」(言叢社)の作者、黄霊芝さん(76歳)に、この11月、「愛媛県文化振興財団」から「正岡子規国際俳句賞」が贈られたのである。

まことにうれしいことだが、真に喜ばしいのは受賞されたことではない。この

懐旧の念ぐらいで30年、戒厳令下のときも欠かさず、五七五をひねられるものではない。これは執念であり、歴史に対する意地である。

日本人として育てられ、日本語が唯一の表現語だった黄さん、作家を志していた青年黄霊芝にとって、日本から中華民国への支配者の交代は、青天の霹靂であり、日本語から北京語への言語

世界の大転換は、イチローからバットを奪ったに等しかったろう。

黄さんは、その苦渋を胸に仕舞い込みつづ、この半世紀、意地で創作を続けてきた。誰からの評価も期待しなかった。そして、これだけ多くの台湾人が日本観光に出かけているのに、「日本文学」黄霊芝はいままで決して日本へ足を向けようとしなかったのである。これも意地であり、執念である。

その黄さんが、日本からの招待をついに受け入れた。その心境を問う勇気を私は持ち合わせていないが、黄さんの孤独な戦いに、ようやく平和が訪れたような、そんなほつとした気持ちである。

歴史上、さまざまな困難を乗り越えてきた台湾の人びとの強い意志と郷土への愛、命や人生が粗末にされる日本の風潮を見ると、私たちが呉乙峰や黄霊芝の作品から学ぶことは少なくないと思う。



自宅庭に佇む黄霊芝さん